

赤松明彦（京都大学）

6世紀に活躍したジャイナ教の思想家マッラヴァーディンの著作『十二の観点の輻からなる車輪』（以下、『観点車輪』と略）は、当時流行していた諸学派の世界観（ものの見方）を図式的に把握しようとした論書である。それは各学派の主張の内容を要約して単に批判したものではなく、各学派の言説のもとにあって、それを生み出すことになった「ものの見方」を体系的に分類し、それぞれの成り立ちを図式的にかつ網羅的に説明しようとする意図をもつものであった。

「見られるものはひとつであっても、ものの見方は様々である」とは、バルトリハリの言葉であるが、この考えを受け継ぐかたちで、マッラヴァーディンがこの著作を構想したことは明らかである。この世界について、ある者は、変化し多様なものであると主張するが、別のある者は、永遠不変だと主張する。このような「ものの見方」の成り立ちを、観点のとり方から説明しようとするのが、「十二の観点」という図式である。ひとつの同じ事物について語るときの観点の基本的なあり方として、マッラヴァーディンはまず、vidhi（実定）とniyama（述定）という二つを提出している。前者は事物についての indicative な表現、後者は predicative な表現とひとまず言えるかもしれない。ある事物について、まず基本的には、vidhiの観点、niyamaの観点、そしてvidhiとniyamaが共立する観点の三つがあるとされる。この三つの観点は、言ってみればある事物についての認識論的な「ものの見方」の三類型であるが、この「ものの見方」が、存在論的な「ものあり方」へと転化されると、それぞれについてさらに同じ三つの「ものの見方」がありうることになるだろう。かくして、すべての観点を列挙すれば、十二の観点がありうるのである。

さて、マッラヴァーディンは、『観点車輪』の各章において、可能な観点を順次とりあげながら、それらを別の観点から批判して行くのであるが、各章において、すなわち十二あるすべての章において、「空華」（kha-puṣpa）を、対論者の主張に対する否定的な喩例として示している。そこでの批判の仕方は、おおむね、「対論者によって言われるもの・ことは非実である。非存在であるから。空華のごとし」というパターンをとっている。そこで本発表では、この「空華」の用例を逐一検討することによって、その存在資格を問うことにしたい。いったいすべての観点において、否定的な喩例として働く「空華」とは、どのような存在であるのか。それは対論者の肯定的な主張を批判するための否定的な喩例、つまり対論者の主張の虚偽を表すものであるのか。しかし、もし「空華」が、対論者の主張の虚偽を言うものがあるならば、それはパースペクティヴィズムと矛盾するのではないか。マッラヴァーディンは、なぜかくも頻繁に、「空華」の喩例を持ち出したのであろうか。